

## 論文

# 1980-90 年代『SPA!』にみる〈オタク論〉と〈宗教〉言説 —「宗教とサブカルチャー」論再考のために—

茂木 謙之介・

## 1.はじめに

本論文の目的は、1980 年代後半から 1990 年代前半における〈オタク論〉と〈宗教〉言説の関わりを論じることを通して、近年宗教研究の文脈において成立している、「宗教とサブカルチャー」論を再考するところにある。

近年、宗教研究においてはサブカルチャーの中に宗教性を見出すアプローチがひろく展開するとともに、それへの相対化の視点が提示されつつある。例えば、最新のサブカルチャーと宗教に関する研究を集成したもののひとつとして『國學院雑誌』の特集「現代日本社会と宗教」を挙げることができるが、そのなかで石井研士は、これまでの弓山達也、正木晃、平藤喜久子、渡辺和子らの取り組みを積極的に評価しつつ、かかるテーマでの「考察を阻むもの」として、「研究対象の任意性」「読者（視聴者）が受ける影響の問題」「商業性に関する問題を考慮に入れる必要性」を提起している<sup>1</sup>。

たしかに多メディア化が進展する現状において、サブカルチャーと宗教の関係性を論じようとするならば対象と受容者、そしてそれらを囲繞するものは考慮対象としなければならないのには首肯できる。だが、問題は石井の指摘に留まるものではないと思われる。石井も引用した弓山達也の議論を参照してみよう。アニメについて宗教との密接性を指摘する弓山は以下のように述べる。

宗教団体はわかりやすい布教の武器としてアニメを用いてきたし、アニメ・クリエイターも自らの作品の主題なり世界なりに深まりと広がりをもたせるために、善と惡、運命、生と死などの宗教が扱ってきた主題を意識的、無意識的に援用してきた。そう考えると宗教的な主題のないアニメを探す方が難しいかも

---

・ 日本学術振興会特別研究員(PD)

しれない<sup>2</sup>

確かに弓山の指摘する通りアニメを含むサブカルチャーと宗教の相互浸透は存在しているのかもしれない。だが、同時にここにはかかる主題を扱うものとして、「アニメ」の代わりに他のさまざまな文化を代入することでも成立するという問題があることに気づかされるのではないだろうか。つまり、もしこの「アニメ」に「小説」や「詩」をいれたとしても問題なく成立するだろうし、その場合には別段目新しいテーマでもなくなる。ここではむしろ「宗教とサブカルチャー」という枠組みについて積極性を見出したい宗教研究者の欲望が前景化しているということができるのではないか。

では、このような宗教研究者の「サブカルチャー」を語る欲望はどこから生起しているのだろうか。本稿では、その一つとして 1980 年代後半から 1990 年代初頭における〈オタク〉語彙の誕生と流布の時期を対象とし、〈オタク〉語彙に関する言説と宗教研究・〈宗教〉言説との連関について考察したい。

だが、本稿の掲げるこの課題には二つの困難が付きまとつようと思われる。それは即ち、第一に〈宗教〉とは何か、そして第二に〈オタク〉とは何かという、共に一元的な回答を用意することの困難なものである。〈オタク〉とは何か、という問い合わせについてはすでに漫画編集者・批評家の竹熊健太郎が以下のように指摘している。

それでもオタクって、オタクについての話が本当に好きですよね。日本人が「日本人論」を異常に好きなように。たぶんこの二つは基本的に同質な関係なのだと思うんですけど。定義とか用語にものすごくこだわったりする。<sup>3</sup>

また宗教研究の分野においては、1990 年代の T.アサド<sup>4</sup>の提案にはじまり、2000 年代以降は日本でも磯前順一<sup>5</sup>をはじめとした提起がなされたように、〈宗教〉概念の構築性を指摘し、概念と学知の密接不可分性が明らかにされると共に、それらの相対化の必要が唱えられている。

これらの提起を踏まえ本稿では、誰が、何のために、何を対象として〈オタク論〉を語るのかを問うメタ〈オタク論〉を、具体的に〈オタク論〉に〈宗教〉がいかに導入されたのか、宗教学に関わる人びとは〈オタク〉をいかに語ったのかを〈オタク〉語彙の語用論から検討することを通して考察したい。検討対象は、1983 年における〈オタク〉という語彙の誕生前後から 1995 年オウム事件前後における〈オタク

論) とし、特に社会問題として前景化した宮崎勤事件(1989)およびオウム事件(1995)に注目して考えてみたい。

その中でも特に重要なメディアとして本稿後半で中心的に扱うものとして雑誌『SPA!』がある。1988年からフジサンケイグループの扶桑社より出版されている雑誌『SPA!』は1990年代初頭において通常号33万部<sup>6</sup>を発行する25~35歳の男性サラリーマンを中心的な対象とした週刊誌である。後述するように同誌はまさしく同時代用語としての「オタク」を牽引した世代を対象とともに、その記事内容はサブカルチャーとともに〈宗教〉を取り出すものでもあり、本稿で考察したい二つの領域の接点として最適のメディアである。

以下本稿ではまず1980年代の〈オタク〉語彙の成立近辺における〈宗教〉言説について考察を試み、続いて『SPA!』に焦点して1990年代までの〈宗教〉言説に〈オタク論〉の関係性を考察してみたい。

## 2. 〈オタク〉誕生前後と〈宗教〉言説に—『漫画ブリッコ』の近辺から—

### 2-1. 〈オタク〉語彙の誕生

手始めに参照しておきたいのは〈オタク論〉の嚆矢である、1983年6月の中森明夫『おたく』の研究である。同論が掲載された雑誌は、大塚英志によれば日本で二冊目の「ロリコンまんが誌」である『漫画ブリッコ』である<sup>7</sup>。そこに掲載された中森のテクストは〈オタク〉語彙誕生の瞬間として知られている。

コミケット（略してコミケ）って知ってる？いやあ僕も昨年、二十三才にして初めて行ったんだけど、驚いたねー。これはまあ、つまりマンガマニアのためのお祭りみたいなもんで、早い話しマンガ同人誌やファンジンの即売会なのね。それで何に驚いたっていうと、とにかく東京中から一万人以上の少年少女が集まってくるんだけど、その彼らの異様さね。なんて言うんだろうねえ、ほら、どこのクラスにもいるでしょ、運動が全くダメで、休み時間なんかも教室の中に閉じ込もって、日陰でウジウジと将棋なんかに打ち興じてたりする奴らが。  
モロあれなんだよね。髪型は七三の長髪でボサボサか、キョーフの刈り上げ坊っちゃん刈り。イトヨーカドーや西友でママに買ってきて貰った980円1980円均一のシャツやスラックスを小粋に着こなし、数年前はやったRのマークの

リーガルのニセ物スニーカーはいて、ショルダーバッグをパンパンにふくらませてヨタヨタやってくるんだよ、これが。それで栄養のいき届いてないようなガリガリか、銀ブチメガネのつるを額に喰い込ませて笑う白ブタかてな感じで、女なんかはオカッパでたいがいは太ってて、丸太ん棒みたいな太い足を白いハイソックスで包んでたりするんだよね。普段はクラスの片隅でさあ、目立たなく暗い目をして、友達の一人もいない、そんな奴らが、どこからわいてきたんだろうって首をひねるぐらいにゾロゾロゾロゾロ一万人！それも普段メチャ暗いぶんだけ、ここぞとばかりに大ハシャギ。アニメキャラの衣装をマネてみる奴、ご存知吾妻まんがのブキミスタイルの奴、ただニタニタと少女にロリコンファンジンを売りつけようとシツコク喰い下がる奴、わけもなく走り廻る奴、も一頭が破裂しそうだったよ。それがだいたいが十代の中高生を中心とする少年少女たちなんだよね。(略) なにかこういった人々を、あるいはこういった現象総体を統合する適確な呼び名がいまだ確立してないのではないかなんて思うのだけれど、それでまあチョイわけあって我々は彼らを『おたく』と命名し、以後そう呼び伝えることにしたのだ。／どうして『おたく』って名づけられたのかとか、『おたく』とは何かなんて疑問には次回からゆっくりと本格的に答えていくことにして、でもなんとなく感じつかめるでしょ、君の廻りを見廻してごらん、ホラいたいた、『お・た・く』が——／ところでおたく、『おたく』？<sup>8</sup>

ここでは、「運動が全くダメで、休み時間なんかも教室の中に閉じ込もって、日陰でウジウジと将棋なんかに打ち興じてたりする奴ら」が取り上げられ、そのビジュアルや行動を含めて「おたく」と名指されており、筆者とは差異化された存在を指す用語として「おたく」語彙が生成されている。同連載は続き、大きな反響を呼び、その後〈オタク〉と言う語は急速に人口に膾炙していく。

中山智省は、かかる言説について、新人類と「おたく」を対比し、前者に寄り添う言説を紡ぐものとして中森の発話を位置付けると同時に、このように「おたく」と名指される存在に中森もまたカテゴライズされていたことを指摘している<sup>9</sup>。即ち、一見差異化された立ち位置から「おたく」をレーベリングしているかのようなかかる言説も、実際の中森の在り様を知悉している主体から見れば、自虐をこめた語りとして捉えられるテクストだったというのである。

だが、この連載は3回をもって打ち切りとなる。かかる動向について同誌において総括しつつ話題を打ち切る方向へと導いた存在として編集長の大塚英志がいる。

この問題については一度キチンとしておかなくてはいけない...と思っていました。まず、新しい読者には「おたく」という単語の意味が不明だと思うので説明しますがこれは以前「ブリッコ」誌上で、東京おとなクラブの中森明夫氏がいわゆるロリコンファンやアニメファンを指す蔑称として作りだした造語です。  
これほどあからさまに差別することを目的として作られた<差別用語>も珍らしいと思います。<sup>10</sup>

ここでは中森の生んだ「おたく」語彙についてそれは「蔑称」であり、「<差別用語>」であると位置付けている。

山中は、かかる語彙が 1983 年以降コミックマーケットを中心として普及し、1985 年前後におけるマスメディアにおける「おたく」語彙の流通を経て正統／異端の問い合わせが出来たと指摘しているが<sup>11</sup>、これらを踏まえるならば、実質的に蔑称として「おたく」語彙は総括され、流布していったこと、そして極めて論争的な運用がなされる側面があったことは指摘しておかねばならないだろう。これを念頭において、続いて「おたく」語彙の爆発的な流布を見る、1989 年の連続少女殺害事件、通称宮崎勤事件における〈オタク論〉を見てみたい。

## 2・2. 宮崎勤事件に沈着する〈オタク論〉と宗教学知

この事件においては犯人の所持品に大量の漫画やアニメを録画したビデオテープがあつたことなどから犯人のパーソナリティを〈オタク〉と位置づける〈オタク論〉が爆発的に生起することとなる。ここではすでに名の出ている中森と大塚の対談を中心とした『Mの世代』の一節のうち、大塚の発言のみを引用したい。

奇しくもまた『サンデー毎日』が新々宗教の告発をしてるんだけども、これはイエスの方舟事件とは違うと言いながら、きっとイエスの方舟事件的なストーリーを彼らは作っているんですね。結局彼らが問題にしているのは、未成年の子供たちが、オウム真理教という宗教の教会か何かに、家を出て行ってしまって帰ってこない。出家しちゃったと。で、子供に捨てられた家族は『子供を返せ』と、教団を告発する。報道もまた未成年の子供が親から隔離されていることが問題点としてまず第一に持ってきてる。でも子供たちに言わせればもはや

捨てるべき家族さえも最初からなかったのだと思う。むしろこの子供らが家族を捨てていったことで、ようやくこの捨てられた人たちは子供が家族だったというリアリティを持ったような、そんな気がするんだけども。何か子供たちの家族捨てというか、親捨てみたいなものがじわじわ始まっているような実感がある。 M君に關してもぼくは、彼のM家を捨てていくようなお話だったのかなという気がちょっとしてるんですよね。／(略)エリアーデが言ってるんだけど、近代の一番の特徴というのは、イニシエーション というのを持たないことなんだと言うんですね。何でかといったら、そもそも大人とか、子供が家を出て新しくつくるべき家族みたいな、そういうイニシエーションを経た先として子供がいなくちゃいけない枠組みみたいなものが固定してないんだと。<sup>12</sup>

同書は、批評家としての大塚英志を世に知らしめることになったメルクマールとして、また『漫画ブリッコ』の「おたくの研究」を契機とした中森と大塚の仲たがいが解消された出来事としても記憶されている。

ここで「M君」即ち宮崎勤のような〈おたく〉を生み出したことの責任を語る大塚は、『サンデー毎日』によるオウム真理教の告発を指摘しつつ、そこに宮崎勤事件を重ね合わせている。マスメディアにおける報道の在り方を相対化する視点が提示されていることともに、ここで注目しておきたいのは、かかる事件の生起と〈未成熟〉という問題が「イニシエーションの不在」に求められ、その論拠に宗教学者M.エリアーデが参照されていることである。いわばかかる言説のフレームを与える一人として、宗教学知は参照されていたのである。

ここまでで、1980年代における〈おたく〉語彙について、それが「ロリコン」雑誌で誕生したこと、極めて論争的な運用がなされてきたこと、「未成熟」が語られていたこと、そしてその際に「エリアーデ」が参照されることもあったことを確認しておきたい。とりわけ〈オタク〉語彙の誕生とその展開の中で、そこに極めて近い立ち位置に大塚英志という宗教学知とも類縁性をもつ主体が極めて戦略的に行動していたことは見逃してはならない。彼の提示した枠組みは1980年代から90年代の宗教学知と〈オタク論〉の関係性の一つの共通した型として考えることができる。次章ではその展開を見てみたい。

### 3. 〈オタク論〉と宗教学者の隣接—雑誌『SPA!』の検討から—

つづいて 1980 年代の後半から、1990 年代における〈宗教〉言説と〈オタク論〉について、雑誌『SPA!』に注目して考察を試みたい。冒頭でも述べたように、同誌は同時代に〈オタク〉と名指された世代である 20 代から 30 代を読者層として想定し、〈オタク〉に関する言説を多数生成する一方、1980 年代からメディアコンテンツ化する新新宗教に関する言説を積極的に提示するメディアであった。

『SPA!』の創刊に関わり、1992 年から 1995 年まで三代目編集長をつとめたツルシカズヒコはその回想録において、以下のように述べている。

当時（註：1983 年）、ぼくは『月間 OUT』というアニメ誌の編集に携わっていて、コミケや「おたく」とは至近距離にいた。20 代にそんな空気を目一杯吸っていた僕が『SPA!』の編集者になり、「おたく的な企画を手がけ、『SPA!』は部数を伸ばしていった。（略）巻頭グラビア「ニュースな女たち」に起用した写真家の篠山紀信とコラムニストの中森明夫、あるいは渡辺（註：同誌二代目編集長）の東大文学部宗教学科の同窓である中沢新一や四方田犬彦などのニューアカデミズム人脈の起用。『SPA!』黄金期の土台を築いた渡辺の功績は大だった。<sup>13</sup>

ここでは「おたく」に関する話題の積極的利用を行ったこと、そして二代目編集長をつとめた渡辺直樹の東大文学部宗教学科同窓者のつながりが記事作成に影響したことを述べている<sup>14</sup>。まさに、1980 年代末から 1990 年代にかけての〈おたく〉と〈宗教〉に関する話題が隣接する磁場として雑誌『SPA!』があったことを指摘できるだろう。今回は 1988 年の創刊から 1996 年までの全号を通覧し、〈おたく〉と〈宗教〉に関わる問題をピックアップして議論の俎上に載せたい。

### 3-1. 〈オタク〉擁護言説の展開

まず注目したいのは、同誌における〈オタク〉擁護言説の展開である。1989 年 7 月に宮崎勤が逮捕され、8 月上旬に少女殺害について自供をはじめた直後、同誌では「内気、ロリコン、ビデオマニア「宮崎勤」はどこにでもいる」として特集を組み、現代日本に遍在する者として宮崎勤を位置付けるとともに、表紙に頭にモニターをつけてゲームをプレイ中の作家・高橋源一郎のグラビア（図 1）を採用する<sup>15</sup>。



図版 1

また翌週のコラム「世間のオキテ大人のオクテ」では以下のような言及が為される。

喫茶店で男の子が、GF らしき相手とクラスメートの噂話をする。「江口もおたく（マニアックなアニメファン）じゃん？ アップネーよな、暗いしょ」野本綾子ちゃん殺害の容疑者として宮崎くんがあがってから聞いた言葉は、まだまだたくさんある。人間（私）じゃない、と安心して始める攻撃。黙ったまま私は、人が人を排除していくってのはこーゆーことなんだな、とボンヤリ考えた。<sup>16</sup>

ここでは「"宮崎"ってアダ名されちゃうビデオマニアのキミ、負けんなよ」というタイトルとともに、「ビデオマニア」と名指される人びとが宮崎勤という存在を経由して疎外される様相を指摘するとともに、それを「人が人を排除していく」構造として一般化する。

また前掲のツルシ書でも画期的だった企画として位置付けられているものとして同年 9 月 20 日号の中森明夫／大塚英志「緊急対談 宮崎勤クンの部屋は僕らの世代共通の部屋だ！」が挙げられているが、これはのちに前章に引用した大塚・中森書として再録されていく。

かかる直截的な〈オタク〉擁護言説の傍らで、間接的なオタク擁護乃至、〈オタク〉文化コンテンツが生み出されていく。

### 3-2. 「イカす！ オタク天国」の誕生

同誌の1989年12月6日号から、コラム「イカす！ オタク天国」の連載が開始される。

これまでのナツカシといえば、決まって月光仮面だのウルトラマンの話題。ふ、古すぎる、もうウンザリだ。新入社員に笑われるぜ！ そこで、当オタ天は新しい懐古に取り組んだ！ このコーナーをガイドに同僚、部下をうならせてほしい！

1970年代以降のアニメ・特撮・アイドル等が紹介され、のちにそのコラムからデビューを果たした「おたく評論家」宅八郎による独立したコーナー化が図られていく。同時にここではサラリーマンを対象とした「教養」として〈オタク〉文化が提示されていることにも気をつけたい。まさに宮崎勤事件を経由することによって、かかる文化は一躍メディアコンテンツとして躍進を遂げたのである。

そのような紙面構成がなされていく中で、再び大塚英志はクローズアップされていく。1990年1月3日・10日合併号で「90年代をリードする90人」に選ばれた大塚（図2）は以下のように述べる。

消費社会に生きるわれわれは、みんな“オタク”なんです。アニメというモノに囲まれていればオタクと呼ばれ、マガジンハウス的なモノで囲われていればオリーブ少女といわれているだけなのです。（略）80年代は消費社会が行きつくところまできました。われわれはモノをよりどころとして、かろうじてアイデンティティを保っているのです。（略）だから90年代は宗教にむかわざるを得ないんです。

ここで大塚は消費社会にいる「われわれ」をすべて〈オタク〉と名指すことによって、その範囲拡張を行うとともに、その内実は不明ながら〈宗教〉への言及を行っていく。



図版 2

また、宅八郎責任編集の特集／同誌の売り上げ伸長に貢献したとされる 1990 年 3 月 7 日号の「緊急大特集 ひそかな巨大ネットワーク＆パワー 『おたく』が世紀末日本を動かす」では、「おたく」が肯定的に認知されつつあることについて以下のように述べる。

ここで確認しておかねばならないのはその「幸福」は M 君を人柱とすることで成立しているということだ。〈おたく〉の不毛<sup>ケガレ</sup>を彼が一人で全部背負ってくれたから〈おたく〉はトレンドイな存在たりえている。〈おたく〉という語はその成立直後からそうやって人柱の機能を内包しており、最後の最後に選ばれたのが彼だったわけだ。〈おたく〉と〈おたく社会〉をその一点でぼくは嫌悪する。かつての中森明夫よりぼくははるかに〈おたく〉が嫌いなのかもしれない。

〈おたく〉言説を「ケガレ」排除の構造として捉え、現象としては認めつつ、「不毛」さを強調していく。これは 2000 年代以降における大塚の言説にも確認可能な言説であるが[大塚 2008]、ここでも 1989 年以降緩やかに〈オタク論〉に現代社会批評の側面とともに、些かキッチュな宗教学的言説が導入されていることが指摘できるだろ

う。

### 3・3. 〈オタク〉と〈宗教〉の同時メディアコンテンツ化

このような状況を踏まえた上で、同誌の記事群において興味深い〈オタク〉と〈宗教〉の同居についてみてみたい。

1991年1月31日号では〈おたく〉文化紹介欄である「イカす！ オタク天国」では以下のように同時代にメディア露出をはじめていたオウム真理教について言及する。

話題のオウム真理教に、ついにアイドルが誕生した！！(略)アイドルは時代を象徴し、司る巫女だ。ピーナッツは50年、60年代を！ ピンクレディーは70年代を！ ウインクは80年代を！ そして90年代はオウム少女隊！？ ピーナッツと言えば……そう、モスラだッ！ 麻原彰晃は〈怪獣〉なんだここで言う怪獣は醜いモンスターじゃない。キングコングを見てもわかるように、聖性のシンボルだ（中沢新一は『雪片曲線論』でゴジラを聖獣としている）。そしてオウム少女隊は、モスラを守る小美人ピーナッツなワケ。

「オウム少女隊」をアイドル言説の系譜上に位置付けると共に、特撮映画というサブカルチャーのコンテンツとの隣接が指摘され、しかもその理論的な支柱として選択されているのが宗教学者・中沢新一の言説なのである。

翌年7月22日号の中森明夫編集「中森文化新聞」内の企画高円寺まり子「「宗姫文春」を読む 宗教でキレイになる！」では統一教会の合同結婚式について揶揄的に言及される。なお、「中森文化新聞」は、サブカルチャーについての紹介ページであり、〈オタク〉語彙も頻出する<sup>17</sup>。

さて、このような〈オタク〉と〈宗教〉の同居を考えたとき、1992年9月2日号は極めて興味深い記事が並ぶ。特集記事である「Special Report」では「統一教会」「愛の家族」などの新新宗教における”結婚と性”が問われ、巻頭の篠山紀信によるグラビア「ニュースな女たち」では「イエスの方舟」が写され、毎号グラビアにアイドル記事を掲載する中森明夫は「方舟にのる女たち」と題し、「今年の夏もまた宗教が熱い。いつから夏は宗教の季節になってしまったのだろう？ 一昨年はオウム真理教だったし、昨年は幸福の科学だった。そしてこの夏は統一教会の合同結婚式で

ある。」と述べる。まさに 1990 年代の前半において、〈オタク〉および〈宗教〉が隣接しつつメディアコンテンツ化していたのである。

このような中で、宗教学者たちは如何なる言説を展開していたのだろうか。〈オタク〉に関わる言説として中沢新一の言説をまず見てみたい。

「おたく」は高度資本主義の人類的なモルモットとされている日本にあらわれはじめた、新しいマシニック世界を探る勇敢な測量技師たちである。(略)「おたく」はパラノイア的な情報整理力とその処理能力、ほとんど柳田民俗学的なフォークロア的ないし神話的思考法、肉体を道具にする体育の能力のいちじらしい欠如のひきかえにあたえられた情報化されたシミュレーション空間における驚くほど敏捷なリアクションの能力、サブリミナルな潜在回路とか電話をおしてしか他人とコミュニケーションできない日本のゲイ文化の形成などをとおして、そのマシニックな世界に挑む。女にもてようがもてまいが、そんなことにはめげる彼らではない。だいいち彼らほどのパラノイアにはセクシャルな関係は、あまりに人間的でかったるいのだ。それに彼らの意識は、もはやいままであつた人体のなかだけで生きているのではないのかもしれない。『おたく』の意識は人体の内部にひろがる、目に見えないマシニック空間を生きている。だから彼らは、まともな大人たちがまともにつきあえる相手なんかではないのである。

ここで中沢は「おたく」の可能性を指摘する一方で、「彼らは、まともな大人たちがまともにつきあえる相手なんかではない」と「まともな大人」と〈オタク〉の対比を行うなど単純に肯定的評価と位置付けがたい発話をを行っていると言えるだろう。また島田裕巳は同時代の宗教状況に関して以下のように述べつつ、〈オタク〉への言及を行う。

宗教とは人の心の拠り所。役目自体は変わっていないのですが、その質と言うものが変化してきています。昔だと飢餓などの問題は、人がどう頑張っても解決できなかった。もうすぐるところは何もない、そんな状況で宗教に救いを求めたのです。ところが現代の日本は社会も安定し経済的にも豊かで、身の回りにものはある余っている。本来の意味でいうと救いを求める必要がない。なのに、自分が何をやりたいのかわからないなどという理由から、宗教に頼ろうと

するパターンが殆どなのです。若い人は特に、人生における体験や悩みが稀薄になっている。そして、人間関係までも稀薄、というか拘束力がなくなっています。つまり、精神的にオタク化の傾向が強くなっている。

まさに宗教の希求される原因として「オタク化」が求められているわけだが、特に島田に関しては他にも同様の言及を行っていることを見逃してはならない。

オタク族とは、適当にバイトをしながら、親のスネをかじり、親の与えてくれた個室に閉じこもって、自分の趣味の世界に生きる若者たちのことをさす。かれらは、一般の人間からすれば、そのおもしろさが理解できること一売れないアイドルを追いかけたり、昔のアニメのビデオにこつたりといったことをマニアックに追及する。かれらは、話し相手のことを「オタク」と他人行儀に呼び、緊密な人間関係が生まれることを回避しようとする。このオタク族という言葉には、そういった若者たちを批判しようとする社会の姿勢が現れている。

いわば「オタク」をアメリカに軍事的・経済的に擁護されて好きなように生きてきた日本のアナロジーとして捉え、多少の屈折をはらみつつ未成熟でネガティヴなものとして〈オタク〉語彙を運用していることがうかがえるだろう<sup>18</sup>。いわば1980年代以降の〈オタク論〉の文脈を踏襲し、なお強化するかたちで宗教学者たちの言説はあったのである。

### 3-4. ポスト・オウム事件の〈宗教〉言説と〈オタク論〉

最後に1995年のオウム真理教事件後の展開を見ておきたい。

オウム事件後、『SPA!』では、一見するとオウム擁護とも受け止め得る記事が散見される。そこにおいては、マス・メディア批判がキーワードとなる。マスメディア批判を通じて〈おたく〉と〈宗教〉との間に共闘の回路が生まれているのである。95年4月19日号では、上九一色村に宅八郎が取材し、以下のように述べる。

しかし、今やオウムに関しては、どんな捜査もどんな報道も許される、という状況だが、これはマズイ。警察が不当な見込捜査をやったことは間違いない。(略)ボクがかつて麻原彰晃に会った時、会見に危険性は感じなかった。ただ、怖い

と言えば、教祖である麻原にではなく、むしろ彼を取り巻く側近、幹部たちにこそ何らかの「恐怖」を感じたことを強くおぼえている。その怖さは信じさせる側ではなく「信じようとする力」の狂気だったように思う。それが「宗教というもの」なのだろう、とも思った。そして、それ以上の「怖さ」をボクはいま「日本の秩序」の信者にも感じてしまうのだ。今こそ思い出してほしい、去年長野県松本市で第一のサリン事件が起きた時のことを。警察そしてマスコミも犯人は、第一発見者の会社員だと、ほぼ“断定”したし、“断罪”した。世論もそれを支持したはずだ。

5月3日・10日号では教団幹部と宅八郎の対談が行われる。同一世代の宅と教団幹部の上祐史浩が事件に限定しないかたちで語り合う様が看取される。

宅 上祐さんとは同じ年のボクですけど、同世代の話をさせてください。入信前に好きなテレビ番組とか当時の趣味、アイドルとか好きな人とかいたのかな。

上祐 私は人間を超えるものっていうのが関心ありましたからあの当時有名だったS F ものとか超能力ものとか。『宇宙戦艦ヤマト』とか『機動戦士ガンダム』とか『バビル二世』の世代ですよね。

宅 上祐さん、完全におたくじゃないですか（爆笑）

ここではサブカルチャーへの言及を経由するかたちで、宅が教団幹部を「おたく」として囲い込む言説が確認される。まさにオウム擁護の言説は〈オタク〉擁護と深く結びついていたのである<sup>19</sup>。

かかる共闘はいかにして成立していたのだろうか。それを解き明かすのは前年ににおける評論家宅八郎の逮捕騒動がある。1994年12月7日号「宅八郎はなぜ「不当逮捕」されたか！？」では、当時小学館との論争を行っていた宅八郎が起こした交通事故が当て逃げとして扱われ、逮捕・報道された。これに対し『SPA!』ではキャンペーンをはり、中森明夫、大泉実成、宮台真司らが支援することとなった。すでに菅直子が指摘するように、同時代では特にマスメディアにおけるフレーミングが問題となっており、かかる報道をめぐる批判がこの事例についても参照されていたのである。特にここでは1980年代末における〈オタク〉差別批判への対応が再話されており、同誌がかつて〈オタク〉擁護によって成功をおさめたことを想起す

るならば、〈オタク〉と〈宗教〉の共闘を提示することで一種の成功の再現を狙った可能性も指摘できよう。

その一方で、言説布置には変化が生まれていたこともまた指摘しなければならない。1995年5月3日・10日号では「世紀末」言説に関して宗教学者として井上順孝および鎌田東二がコメントを求められており、新宗教というよりは日本の固有性として神道への言及がなされている。また同年6月7日号「宗教にハマった若者たち」では、『風の谷のナウシカ』、『孔雀王』などが紹介されるとともに、弓山達也が「漫画や雑誌などから火がついたオカルトブームは、映画、アニメ、ゲームなどにも広がり、すっかり市民権を得た」とコメントしている。かつて〈オタク〉をネガティヴにとらえ、オウムをはじめとした新宗教を肯定的に評価していた中沢・島田が影を潜め、それに代わる人材が模索されていたのである<sup>20</sup>。

対照的な言説として、『SPA!』ではないが、竹熊健太郎の『私とハルマゲドン』を挙げることができる。「おたく宗教としてのオウム真理教」という副題からもわかるように、オウムと〈おたく〉を接続する議論が行われている。ここで竹熊は以下のように述べる。

戦後日本の経済的成功と、七〇年代以降の「イデオロギーの時代の終焉」は、世界に例を見ないほど大量の「屈折したインテリ」を出現させた。彼らの多くは「オタク」と呼ばれ、ありあまる知性を、アニメやマンガ・SFなど生産には何の役にもたたない領域につぎ込み、熱中するようになった。(略)それが彼の「戦い」なのである。なんに対して戦うのか。それは彼を取り巻いている、ヘドが出るほど無意味な「生産性の世の中」に対してである。

オタクが神秘主義やオカルトに惹かれるることは、別に不思議なことではない。それは非生産・非日常の極致であって、生産的な日常社会とまっこうから対立するものだからだ。むしろこれは、あらゆるオタクがたどりつく最終地点であるとも言えよう。

(略)情報社会や高度資本主義社会に適応するために人間はオタクになったとか。宗教も情報産業の一種ですから、オタク向きですよ。釈迦なんてオタクの典型でしょう。世間を捨ててあんなわけのわからないことをやるんだから。キリストだってそう。オタクが文明を作った(笑)

ここでは、「屈折したインテリ」がたどりつく最終地点として新宗教を挙げており、

むしろ情報社会や高度資本主義社会に適応するために人間はオタクになったという文脈を生成している。宗教学的な視点からというよりも〈オタク論〉からの宗教論となっており、いうなれば〈おたく〉を積極的に扱うとともに、〈宗教〉をネガティヴにあつかうという言説が生まれているのである。既存の大塚による「不毛さ」の指摘を参照しつつ、むしろ〈オタク〉のみを切り取り、肯定的な評価に転化させていく傾向であり、それ以降 1990 年代の岡田斗司夫らによる極めてポジティブな〈オタク論〉との呼応関係を見出すことも可能なのではないだろうか。

#### 4.結論

いささか議論が拡散してしまった感があるものの本稿の一応の結論を確認しておきたい。

まず、〈オタク〉の誕生以降、〈オタク論〉には絶えず〈未成熟〉言説がつきまとっていた。これは語彙の論争用語化、換言するならば「〈オタク〉差別」に加担した歴史でもあった。そしてそこには淵源の一つとして宗教学者による度々の再話があった。

ここからは冒頭に述べた「サブカルチャーと宗教」という問い合わせ自体に孕まれた問題性の一端が明らかとなる。〈おたく〉の誕生した 1980 年代における〈オタク論〉生成にすでに宗教学知は内在しており、また 1990 年代における〈宗教〉と〈オタク〉のメディアコンテンツ化と、そこに介在する宗教学者の存在によって、〈オタク〉を論ずる手つきは少なからず〈宗教的〉ならざるを得ない。そもそも 1980 年代から 1990 年代初頭にかけての所謂「ニュー・アカデミズム」のなかで宗教学というそもそも領域横断性を内在させた学問はその中核のひとつ足りえ、それは同時代現象としての〈オタク〉を語るに際して十全に機能したと言える。だがその語りの容易さはそのまま同時にサブカルチャーを語ることによって自らの言説的な卓越化を図ろうとする宗教学者の欲望の発露ともなり、それは結果として「〈オタク〉差別」とも密接なものとなっていたのである。

これがどのように変化するのか、1990 年代後半から 2000 年代以降（特に、東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書、2000）以降の〈オタク論〉の検討が要請されるだろう。今後の課題としたい。

#### 参考文献

タラル・アサド著／中村圭志訳『宗教の系譜 キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』（岩波書店、2004[1993]）

石井研士「ポップカルチャーと宗教序論」「特集 現代日本社会と宗教」『國學院雑誌』（第 116 卷 11 号、2015 年 11 月）

磯前純一『日本近代の宗教言説とその系譜 宗教・国家・神道』（岩波書店、2003）

大塚英志『「おたく」の精神史 一九八〇年代論』（講談社現代新書、2004）

唐沢俊一／岡田斗司夫『オタク論！』（創出版、2007）

森川嘉一郎「「おたく」という文化圏の成立」（岩崎稔ほか編『戦後日本スタディーズ』紀伊国屋書店、2008）参考文献は、MS 明朝、Century、9 pt.で記入。

山中智省「「おたく」誕生—「漫画ブリッコ」の言説力学を中心に」（『横浜国大国語研究』第 27 号、2009 年）山中智省「「おたく」史を開拓する」『横浜国大国語研究』第 28 号、2010）

## 図版

図版 1: 『SPA!』1989 年 8 月 30 日号表紙

図版 2: 『SPA!』1990 年 1 月 3 日・10 日合併号 p.7

<sup>1</sup> 石井研士「ポップカルチャーと宗教序論」「特集 現代日本社会と宗教」『國學院雑誌』（第 116 卷 11 号、2015 年 11 月）

<sup>2</sup> 「アニメと宗教」『現代宗教事典』

<sup>3</sup> [http://takekuma.cocolog-nifty.com/blog/2005/03/post\\_10.html](http://takekuma.cocolog-nifty.com/blog/2005/03/post_10.html)[2016 年 12 月 26 日閲覧]

<sup>4</sup> タラル・アサド著／中村圭志訳『宗教の系譜 キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』（岩波書店、2004[1993]）

<sup>5</sup> 磯前純一『日本近代の宗教言説とその系譜 宗教・国家・神道』（岩波書店、2003）

<sup>6</sup> 年末合併号は 50 万部。

<sup>7</sup> 大塚英志＋ササキバラゴウ『教養としての〈まんが・アニメ〉』（講談社現代新書、2001）

<sup>8</sup> 中森明夫「『おたく』の研究（1）街には『おたく』がいっぱい」（『漫画ブリッコ』1983 年 6 月号）

<sup>9</sup> 山中智省「「おたく」誕生—「漫画ブリッコ」の言説力学を中心に」（『横浜国大国語研究』第 27 号、2009 年）

<sup>10</sup> 大塚英志「妥協の森」（『漫画ブリッコ』1984 年 6 月号）

<sup>11</sup> 山中智省「「おたく」史を開拓する」『横浜国大国語研究』第 28 号、2010）

<sup>12</sup> 大塚英志／中森明夫編『M の世代——ぼくらとミヤザキ君』（太田出版、1989）

- 
- <sup>13</sup> ツルシカズヒコ『SPA！黄金伝説 おたくの時代をつくった男』（朝日新聞出版、2010）
- <sup>14</sup> なお、渡辺は2018年1月現在公益財団法人国際宗教研究所の顧問を務めている。
- <sup>15</sup> かかる「ビジュアル」を表紙に採用したことの戦略性は興味深い。同時代のネガティヴな〈オタク〉イメージを、同時代の最新技術とソフトスースという最先端のファッショング同居する姿で乗り越えようとする戦略性を読み取ることができる。
- <sup>16</sup> 安住磨奈「SPA!OPINION 世間のオキテ大人のオケテ "宮崎"ってアダ名されちゃうビデオマニアのキミ、負けんなよ」（『SPA!』1989年9月6日号）
- <sup>17</sup> おたく評論家として90年代前半を風靡した宅八郎は、同誌から出発したキャラクターであるとともに、中森明夫のアシスタントに出自をもつことを付言しておきたい。かかる人的な連闇の中で〈オタク〉言説は紡がれていたのである。
- <sup>18</sup> この動向は大塚の提起とも響き合うものであり、それは2000年代にオタクを「ネオテニー」として位置付ける東浩紀の議論の淵源となっている可能性を指摘できるが、この連闇については文脈の拡散を避けるため稿を改めたい。
- <sup>19</sup> なお、同時期の『SPA!』では、小林よしのりによる「ゴーマニズム宣言」が掲載されており、そこではオウム批判が展開していたことは押さえておきたい。この背景には編集長・渡辺直樹の両論併記という編集方針があったことをツルシは指摘している。
- <sup>20</sup> 同時期、比較文学者としてコラムを寄せていた四方田犬彦は研究者としての在り様という側面から島田裕巳への擁護を行っていたが、それは一度限りの極めて限定的なものにとどまつており、雑誌全体を見渡したとき、多数派となることは決してなかった。